
Catherine Palmer (著)

『Being and Dwelling through Tourism: An Anthropological Perspective』

Routledge (New York), 2018年、x + 174頁、52.95米ドル

(一) 本書の目的および著者

本書は、観光という活動に体系的な理解を与えることを目的として人類学的視点から考察した研究成果である。これまでの観光研究は様々な研究蓄積がなされてきたものの、いまだにそれを統一的な枠組みで理解・把握することには成功していない。本書はそうした反省から人類学の理論的な考え方を哲学的視点も加えながら一定の統一的な枠組みを構築しようと意図したものである。著者は、イギリスのブライトン大学 (The University of Brighton) の社会人類学者であり、長年 (30年)、同大学で務めた (2015年から2019年までは、芸術と人文科学の大学院研究の副所長を務めた) 後、退職し、現在は人文学部の記憶・物語・歴史センターの客員研究員を務めている。

(二) 本書の構成と章別概要

本書の構成は次のとおりである。

序文および謝辞

- 1 存在すること、住むこと
- 2 感覚的に住むこと
- 3 物質的に住むこと
- 4 建築的に住むこと
- 5 地上に住むこと
- 6 存在すること、住むこと、考えること

参考文献

索引

各章別の概要は次のとおりである。

「序文および謝辞」では、「本書は人類学と観光の関係についての対話」であり、観光に関心ある人々に好奇心および興味深い視点を提供することを望んでいることが示されている。また、本書の考察では、dwelling perspective (住むことの視点) を示した人類学の泰斗ティム・インゴルド (Tim Ingold) の *The Perception of the Environment* に刺激されたことが述べられているとともに、マイケル・ジャクソン (Michael Jackson) など多くの人類学者の研究も参考としたこと

が述べられている。なお、考察のアプローチは人類学が中心ではあるが、人間の体験を広く理解する観点から関連諸科学の知見も必要であるとし、本書の考察の枠組みに、哲学者のマルティン・ハイデッガー (Martin Heidegger) の思想を用いたことを明確にしている。とはいえ、著者が考察に組み込む哲学的アプローチは、あくまでハイデッガーが問うような人間の存在論にこだわるのではなく、観光を人々が有意義な生活を構築する際の活動としてどう考えればよいかというものであると言及している。

次いで、第1章である「1 存在すること、住むこと」では、人類学において重要な概念である宇宙論 (cosmology) が観光研究に応用可能なことを言及している。すなわち、独特の世界観の中での観光の経験が、観光の意味形成を深める上で重要であるにもかかわらず、観光研究においてはいまだに十分な研究がなされていないことを指摘している。その上で、著者はドイツの哲学者マルティン・ハイデッガーの世界内存在 (dwell-in-the-world) の概念に端を発した人類学者ティム・インゴルドの住むことの視点 (dwelling perspective) に着目し、その視点から観光研究を進めることを表明している。また、「人類学は私の指針となる精神ですが、その理論的アプローチは、マルティン・ハイデッガーの1950年代における Building Dwelling Thinking の哲学的エッセイに基づいている」と言及してハイデッガーが Dasein と呼ぶ存在の考え方を重視している。その基本的な構造は、ハイデッガーが「世界内存在」と呼ぶ「世界に吸収されている感覚」を示すものであるという。すなわち、世界と関わるということは、人々や物事や実践に関わることであり、それによって有意義な人生を作り、それを通じて個人が世界の中で自分自身の位置を特定し、くつろげるようになることであると述べており、「住むことは、人間であることが何を意味するかを経験することである」とハイデッガーは主張していると述べている。ここでいう「住むこと」とは、単にその中にいることだけではなく、他の人、場所、状況との関係の中で存在することでもあるという。また、マルティン・ハイデッガーはそこに住むということは、「定命の者、空、地、そして神格」という四重のものの「単純な一体性」の一部となるために団結することであるという。観光のようにホームではなく、離れた場所に住むことは、一時的ではあれ、毎日の生活におけるルーチン、責任、義務に関して異なるリズムと流れをもたらす。そしてこの変化した住まい方は、さまざまな種類の活動や行動に参加し、他の生き方、考え方、生き方に会う多くの機会をもたらす。このようにして、個人は自分の周りの世界とそこでの自分の場所を継続的に作り、作り直す。こうした観光という生活の営みに対して、地球の歴史と地質の観点から、同じ空間と時間を占有する人々がどのようにして全く異なる生活を営むことができるのかを理解することが人類学の基本的な関心であることを考えると、これまで人類学者が観光を通じてどのような「住むこと」が「存在」してきたのかをいまだ十分に調査してこなかったことは驚くべきことであることが言及されている。最後に、この著書の文脈と構成が簡潔に述べられており、本書では、観光を通じた「存在すること」や「住むこと」のあらゆる方法について検証するのではなく、「住むこと」の基本的な要素からの分析を提供するように構成したことが述べられています。

次いで、第2章の「2 感覚的に住むこと」では、観光が世界との具体的な関与となることが説明されている。すなわち、「感覚的な住むこと」とは、心、体、感覚の関係から生じる存在の親密さに関するものであり、生きて呼吸し、考え、話し、動き、行動する具体化された自己として世界に存在し、世界と関わる方法だとしている。「感覚的に住むこと」とは、観光を社会的文脈の中

で生み出され、演じられる実践である。そしてそれは、人間であることが観光客の身体を通してどのようにもたらされるかを構造化し、明確にする関係性に注目したものであるという。すなわち、観光行動は、保有していた知識と感覚的な知識が一体化し、個人に自覚されない知覚・思考・行為である「ハビトゥス」を形成する特定の活動、実践、行動と結びつくという。観光は人間の「住むこと」を表現する方法の1つであるという。観光とは、慣れ親しんだものからの感覚的な出発であり、なじみのない感覚的な方向性、つまり、人間としての生活や生活の他の方法への移行であるという。すなわち、出発と帰還という感覚の領域において、自分が何者であるかを感じ、知るようになる。家に帰ることは移動ではなく、世界についての具体的な理解と再びつながることを意味し、それは、世界の中で自己を位置づける手段として、個人が主観的に選択し、依存する、馴染みのある感覚への感覚的な回帰であるという。したがって、「感覚的に住むこと」とは、世界や自己との会話に参加する方法であるという。私たちが動くのは、身体があるからであり、世界の何かは私たちが動かすように刺激するからだとし、したがって、動きは世界の中の人間であることへの反応であり、この意味で、動きは観光客の体を通しての潜在が人間としての経験にどのような影響を与えるかについての会話に貢献するものであるという。

第3章の「3 物質的に住むこと」では、先の第2章の感覚的肉体的な住むことから物質的な住むことへと進み、「存在すること」と「住むこと」とが物質性とどのように絡み合っているかを説明している。特にイギリスのヒーバー城(Hever Castle)の遺産観光に焦点を当てて、遺産の物体、建物、風景がどのようにイギリスとプロテスタントの世界を創造するために使われたのかを考察している。結局のところ、遺産の時間の物質性を深く考えることは、過去の人々や出来事が今ここをどのように形作ってきたかを示すため、現在が未来に影響を与えるということを理解することであるという。「物質的に住むこと」を考えることは、物体、構造物、およびそれらの物質性を介して人々が時間性の中で自己を位置づけていることと結びつくことを確認することだという。

第4章の「4 建築的に住むこと」では、観光を通じて「存在すること」と「住むこと」の特異な側面を考察している。ここでは、「物」そのものから一步下がって、建築の思考と製作の機能がどのように世界を組織し、認識し、記述する方法であるかを考察している。建物、構造物、風景は、建築と人間の行動、思考、感情を結びつける織り交ぜられた糸に基づいた世界の中に存在する方法であるという。建築は人々を目的地に引き寄せ、観光客の体験を惹きつけるという重要な役割を果たす、ホテルや空港などは観光をサポートする構造を提供し、特に、空港は独特の場所の感覚を生み出すように設計されており、教会、寺院、モスクと同様に、生と死の境界を物理的に表現したものであり、神聖な建物が明確に表現されていると著者は主張している。また、マルティン・ハイデッガーの四重の要素を基盤に人類学の観点から、観光における空港という建築物が創造するエートス(精神)を考察している。そして結局のところ、建築的住居は、測定、計算、寸法、方程式に関連した人間らしさのあり方であり、素材、線と模様、角と角度、バランスとアンバランス、接合と成形、内側と外側、思考と想像力、正確さと寛容さ、創造性と才能といったこれらの「テクニク」は、私たちが誰であるかを作る方法であり、人々、場所、信念を結び付ける方法であるという。この意味で、空港建築の技術は、宇宙論が人間の世界をどのように創造するかを明らかにするものであるという。

第5章の「5 地上に住むこと」では、観光による世界への関与は、時間、場所、歴史、記憶、

すなわち「居住する4要素」と呼んだものの集合に基づくホリスティック（全体的）な経験であることを主張している。ここでは、観光を通じて「存在すること」と「住むこと」の特異な側面から話を進め、地上の住居と呼ばれるより包括的なアプローチを採用している。地球上の住居では、何が私たちを人間たらしめているのかだけでなく、世界としての地球との関係において、私たちがどのようにして人間を作ったのかを理解するために、人間と地球の関係の重要性に焦点を当てている。地上の住居は、世界における人間であるという関係性の全体性を強調しており、実例として、この関係性が理解される際に介して意味を形成する主要な指示対象として、時間、場所、歴史、記憶に焦点を当てている。この4要素は、観光客の活動の一部である場所、人、建物、土産物、風景、活動を通じて、またそれを通して体験されるという。本章では、博物館に焦点が当てられ、文化、自然、考え方や存在の収集と展示は、時間、場所、歴史、記憶の特定の構成を反映していると主張している。この意味で、博物館は地上の住居に関する特定の理解を、より正確には特定の瞬間を非常に目に見える形で表現したものであるという。こうした博物館観光は、人間が地球上の環境と関わり、関係を持つための当然の活動の一つであり、世界の中で自分自身を見つけ、存在するための無数の機会を提供するという。博物館に焦点をあてた意味は、「存在すること」と「住むこと」が時間、場所、歴史、記憶の特定の構成によってどのように影響を受けるかを示し、そのことが世界観をどう構築し、伝達するためにどのように機能するかを示すためだという。

第6章の「存在すること、住むこと、考えること」では、これまで人類学および哲学から引き出された知見を総合的にまとめるための考察がなされている。また、今後の研究に向けたアイデアについての考察もなされている。その主要内容の要約は次のようなものである。

・著者の目的は、日常生活がどのように思考、感情、行動を刺激するかを、哲学を用いて説明することで生きた経験を理解する際の障壁となる一種の概念的抽象化を避けることであり、具体的な例として、観光を通じて「住むこと」が何を意味し、どのように感じられるかを考えることによって、人間という存在がどのように観光によって形成されるのかを明らかにしようとした。

・マルティン・ハイデッガーの言葉を借りれば、観光は一種の設備、より正確にはすぐに世界と関わり、橋渡しできる道具である。この意味で、観光は、ギリシャ哲学で“テクネー”と呼ばれるもの、つまり日常生活の技術や設備とより多くの共通点を持っている。“テクネー”としての観光は、ティム・インゴルドが言及した、人間と世界の絡み合い、混合または交じり合いのゾーンを構築するのに役立つ。

・著者の考えでは、「住むこと」とは、ひとつの場所に固定的に住むことではなく、移動し、行き来し、迷い、発見され、暖かくなったり寒くなったり、勇敢になったり恐れったりすることである。観光で暮らすということは、秩序が乱れることもあれば、不安になることも多い。バス、列車、飛行機などの交通機関はしばしば混乱し、キャンセルされることもある。犯罪は国内だけで起こるものではなく、政治や紛争、テロによって休暇が妨げられることもある。観光客やツーリズムは、世界の不安定を助長し、生み出す力の外に存在するわけではない。観光を通してもたらされる「住むこと」の体験は、喜びであることもあればそうでないこともあり、激しく破壊的であることもあれば、人生の狂気の中で歓迎される幕間であることもある。良いことであれ悪いことであれ、すべての旅行体験は、ティム・インゴルドが言及するような人と世界との混ざり合いから

生じる一部であり、そのような体験はすべて、観光を通じた「住むこと」が、肯定的であれ否定的であれ、人間であることの体験に影響を与える方法のいくつかを示している。人間の経験を表現するものとして、観光は、私たちが、自分が何者であるかを知り、人生の選択を通じて自分が何者であるかを表現する複数の方法を構築することを可能にする。

・観光という活動は、特定の旅行体験を通じてさまざまな自分を構築する複数の機会を提供する。ある意味、これは観光の基本的な宇宙論であり、自己の宇宙論であり、他者の生活世界との関わりを通じて、観光を利用して自己を作り、作り直す自由として理解される。この関わりがどれほど不完全で、つかの間で、部分的なものであっても、それによって個人は、自分がどのように世界に適合しないのかを理解することができる。観光を通じて存在し、住まうことは、この自己の宇宙観の基礎を交渉する方法である。

・観光を通して「住むこと」は、思考や存在の習慣的なパターンに混乱をもたらす。それは一時的あるいは恒久的な自己の変位であり、そのような意味で、世界に生きる人間であることは必ずしも快適な場所とはならない。この変位は、マルティン・ハイデガーが主張する「橋」と同じような方法で起こる。「橋」は、人々がある場所から次の場所へ移動することを可能にすることによって生活を支えるだけでなく、下の流れの周りに風景としての大地を集めることによって、周りの土地を場所へと変える。観光はまた、良い生活とはどのようなものかを創造し定義するという点で、生活を支えるものでもある。観光は、ツアーオペレーターやマーケティング会社、交通網が観光の実現を可能にする。観光は、場所、人々、歴史的な出来事を目的地やアトラクションに集め、「土地」を変えらるることによって起こる。

・観光の秩序化と世界創造、あるいはパフォーマンスとしての観光、あるいはものの見方としての観光は、万華鏡のような形、パターン、色彩の断片であり、それらは特定の瞬間の参照点としてまとまっている。しかしそれらは確かに重要ではあるが、ピースである。それらは、人間と人間以外の環境との継続的な相互作用に呼応して、時間の経過とともに解き放たれ、動き、変化していく。ある意味それはティム・インゴルドの線や結び目と似たような働きをする。

・人々は自分の人生や生き方を自分なりに工夫し、その一環として、自分に降りかかるものに対処するためのメカニズムを必要とする。個人は、自分にできることとやりたいこととの間のバランスについて絶え間なく繊細に交渉することによって、社会の規則や義務によって課せられる制約を管理したり、それに対処したりする。どの社会にも自由と制約のバランスをとる方法があり、多くの社会にとって観光はそのためのツールまたはメカニズムである。観光を通じて存在し、滞在することは、実際の結果がたとえ不完全であっても、このバランスが達成される方法の一つである。

・人間であることの一つの方法としての「住むこと」は、観光に適用されると豊かな可能性を切り開く。なぜなら、観光は人間であるという経験が絶えず作られ、作り直される方法の一つだからである。

最後に著者は、観光という活動が人間としての経験にどのように光を当てることができるかということにもっと注目すべきだと主張している。それは、結局のところ、観光は生きていくための手段であり、観光がどのように生命と生活の状態を実現し、再形成するかについて、より多くの注意が払われる必要があるからだというものである。

(三) 本書への評価

本書は、観光という活動を人類学的アプローチから体系的に考察しようとした挑戦的な研究の成果である。その目的のために筆者は、哲学者であるマルティン・ハイデッガーの『存在と時間』などから着想を得て、その思想基盤を考察のフィルターに用いている。中心的なキーワードは、「存在すること」と「住むこと」であり、それを「感覚的」「物質的」「建築的」「地上」という4つの考察軸から、人類学の泰斗であるティム・インゴルドをはじめとするこれまでの人類学的知見も参考に取り入れながら、生きることにおける「観光」の意味を体系的に把握しようとした。これが本書の最大の特徴である。なお、マルティン・ハイデッガーの思想を活用とした意図は、人間の存在の本来の意味という極限の思想的追求を進めた『存在と時間』などが、観光することの意味をより深く考察する上で、大きなヒントをもたらすと考えたことによると思われる。これまで社会科学・人文科学の多くの研究においてマルティン・ハイデッガーの思想が活用されてきたが本書もまたその一環であり、観光活動が人間の営みの一環であることを思うと、人間の生きることの意味を根源的に掘り下げて考察する上でマルティン・ハイデッガーの思想を用いたことは必ずしも目新しい方法論ではないが、それを観光研究に応用した点に斬新さが認められる。

人類学的哲学的考察アプローチによる本書からは、これまでの観光研究にはみられない多くの有益な知見が見出せる。内容の重複もあり、それらを全て深遠な意味まで含めてくみ取することは難しい作業である。以下では、とくに重要と思われる知見を抽出し、評価することとしたい。

第一は、「観光は個人が世界における自分の居場所について考える機会を提供する」という知見である。観光は、個人は自分がおかれたそれぞれの状況において、どのように世界に適合するのかわからないのかを時間軸を通じて理解する方法であるという、知見は「なぜ人は観光（旅）をするのか」という問いにも通じるものであり、説得性が認められる。

第二は、「観光は一種の設備、より正確にはすぐに世界と関わり、橋渡し出来る道具である」という知見である。著者はこれについてギリシャ哲学のテクネーを引き合いに出し説明しており、上記第一の知見と関連性が認められるが、ネットワークあるいは結びつきの観点から改めて観光の特徴を認識した知見としてユニークさが認められる。

第三は、「観光は、特定の旅行体験を通じて、自分が何者であるかを知り、人生の選択を通じて自分が何者であるかを表現する複数の方法を構築することを可能にする」という知見である。先の第一の知見と関連するものであるが、より目的的な知見として整理されている。すなわち、観光とは、自己を理解する方法だけではなく、自己の自由（観光）と抑制（日常生活の義務）とのバランスに対処するツールまたはメカニズムであることが主張されており、自己改革の可能性を示唆している点で傾聴に値する。

第四は、「「住まい」とは、一つの場所に固定的に住むことではなく、移動し、行き来し、迷い、発見し、暖かくなったり寒くなったり、勇敢になったり恐れられたりすることだ」という知見である。すなわち、「住むこと」とは人生の旅路であり、最終目的地ではないとの意味であり、「道こそが人間になること条件である」と言及するティム・インゴルドの知見とも関連して観光と「住まい」との結びつきをさらに考察する上で有用な知見と評価し得る。

第五は、著者が最終的に指摘しているように、「結局のところ、観光は生きていくための手段で

あり、観光がどのように生命と生活の状態を実現し、再形成するかについて、より多くの注意が払われる必要がある」という知見である。個々人によって観光の必要性には差が認められるとはいえ、著者が言うように生きて行くために必然的な行為であることは確かであろう。しかし、その程度・内容は個人によって千差万別であることは自明である。しかしながら、その影響・効果そしてそのあり方についての洞察はいまだに不十分な状況にある。著者の指摘は重要ではあるがその解明はやはり不十分であり、その点については著者のみならず観光研究者に向けられた重要な課題としてさらに検討していく必要がある。

以上の知見を評価した上で、最後に本書から得た感想を記してまとめたい。

本書の通じて、観光経験は、それまでの自己を変化・進化させる自己組織化作用（オートポイエーシス作用）をもたらす効果が見込めるのではないかが想起された。また、新しい自分を発見し、創造する創発的機能もあるのではないかという点もまた想起された。そして本書で示された宇宙論に立脚すれば、観光は、人間の未来への可能性を見出す一助として、また人間として自己と他の人間・事物・自然との結びつきを変える可能性を有しているのではないかという点にも期待させられた。複雑系の学問範疇に属すると考えられている観光研究においては、困難とはいえ、多元的アプローチが求められている状況下であり、人類学的研究と哲学的研究の統合的アプローチの用いた本書は、そうした試みの一環として評価できるとともに、その成果としてこれまでの観光研究では明確化し得なかった知見を浮かび上がらせることに成功していると評価し得る。著者が言及するようにさらなる研究の進展が必要なことは論を俟たないが、ユニークな試みとして評価したい。観光研究者はもとより、観光行政および観光ビジネスなど観光の動きに関心のあるすべての方々に一読をお薦めする。

(伊藤昭男・北海商科大学)